炬火を掲げていざ謳う　No.6

我らの泉鳥取

2022年6月20日（月）
編集・発行　泉鳥取高校　教頭（妻木）
大阪府阪南市緑ヶ丘1-1-10
https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html

臨海訓練その（１）

1年宿泊行事とクラスづくり

令和4（2022）年、泉鳥取高校は、最後の入学生（47期）を迎えました。47期生は、クラスづくりのため、1年宿泊行事を行います。これは泉鳥取高校として、26年ぶりの1年宿泊行事の復活となります。

昭和51年（1期）、52年（２期）で、一つの屋根の下、集団生活を体験するため、和泉山脈縦走、キャンプ宿泊を実施しました。昭和53（1978）年入学の３期生からは鳥取県岩美郡岩美町の東浜海水浴場において、臨海訓練を実施することになりました。これは、当時和泉高校や佐野高校が臨海訓練を実施し、1年生のクラスづくりをしていることから、その取組を参考に実施したのです。

第9学区は北は忠岡町、岸和田市から南は岬町まで５市４町と地理的に大変広い地域で、言葉も微妙に違います。このような広いエリアから集まる生徒を一つの学校にしていくためには、行事が大きな役割を果たします。

宿泊の中で、他人との付き合い方を学ぶこと、きちんとした食生活を伝えること。そしてこれまで自尊感情が低かった生徒に、遠泳などを通じて自信を持ってもらうこと。以上を目標に取り組みました。

クラス別の民宿に泊まり、神社での肝試し等のクラスレクリエーションを行い、教職員や同級生に対する一体感は高まっていきました。令和3年度のPTA役員には、卒業生がおられましたが、いずれも「一番の思い出は、臨海訓練です」と断言されていました。

しかし、この行事を実施するには、多くの引率教職員のための旅費、前団６クラス、後団６クラス、それぞれ２泊３日ずつ水泳訓練を実施する教職員の体力と教職員数、さらにはサポートしてくれる補助生徒が必要で、海岸状況の下見、生徒班分けのための泳力確認、事前の会場設営、補助生徒の募集と打合わせ、引率教員全員の救命救急法講習など実施には多岐にわたる準備が必要でした。

教職員が高齢化したこと、家庭訪問数の増加による教職員旅費のひっ迫など、多くの否定的要因が重なり、平成７（1995）年に鳥取での臨海訓練は終了、１年生の宿泊行事は平成８年を最後に終了しました。

次回は、事前の準備と「補助生徒」についてみていきましょう。

1990（平成2）年の臨海訓練。遠泳前に気合を入れます